

1. はじめに

本発表では大分県宇佐・中津方言にみられる条件の「テカラ」を分析する。九州各地の方言では標準日本語と異なる条件形式（例えば「ギ・ギー」など）が報告されているが、テカラについては方言地図（およびその元データ）による三井（2019）の研究にとどまっている。本発表では1970年代の録音資料を中心に共時的体系を確認し、テカラの位置づけを示す。

大西編（2016）では、国立国語研究所の全国方言分布調査に基づく項目ごとの分布図が示されているが、「条件」に関わる95図～101図において、大分県中津市・同豊後高田市・福岡県豊前市では標準日本語の「～テカラ」に対応する形式が回答されている。95図「降れば（出ないだろう）」は「フッチカラ」、101図「書くなら（きれいに書いてくれ）」は「カクンジャッタラ」という形式である。この形式は標準日本語では事柄の前後関係を示す接続表現となっており、仮定的な意味の有無という点で大きく異なっている。本発表ではまずこの方言のテカラが仮定的な解釈を持っていることを示すとともに、条件文が担う多くの用法を持っていることをデータを通じて示す。

宇佐・中津方言では標準日本語と同様、複数の条件形式が使用されるため、他の形式との違いも注意する必要がある。本発表ではコーパスを通して、個々の条件表現の生起の頻度や条件を吟味し、条件表現の体系について考察する。

最後に、この方言のテカラの用法の広がりや制限について考察する。近隣の方言でもテカラは広い用法を持つことが指摘されているが（黒木（2008））、当方言のテカラはどのような用法があるのか、談話の中の用法にも注意しつつ記述を進めることにする。

なお本研究では主として1978年（一部1979年）に行われた国立国語研究所の大分県宇佐市の方言談話のデータを用いる。このデータは国立国語研究所のCOJADSの大分県宇佐市のデータの母体となったものである。また、一部に2018年に行った、1943年中津市生まれ・同市在住の女性へのエリシテーション調査の結果も用いる。なお、元データにあるフィラーなどは一部削除している。

2. テカラの形態論的特徴について

本節ではテカラ形式及び関連する形式について整理する。

2.1 テカラ形

本発表でテカラ形と称するものは、標準日本語でいわゆるテ形に対応する形とカラに対応する形が連続したものである。当方言のテ形には、「～テ（デ）」「～チ（ジ）」「～チェ（ジェ）」の形が存在する。またカラに対応する形には「カラ」「カリ」「カ」があるため、「シテカラ・シチカラ・シチェカラ・シテカリ・シテカ…」などのバリエーションがある。

名詞（形容動詞）のテカラ形はコピュラをはさむため、「学生ジャッテカラ」という形になり、形容詞のテカラ形は「オモシロカッテカラ」のようになる。「～ノナラ」に対応するノダ文のテカラ形は「スルンジャッテカラ」となる。

2.2 レバ形

本発表でレバ形と称するものは、標準日本語のいわゆる仮定形に対応する形である。動詞は子音語幹

¹ 本研究はJSPS 科研費 19H01262・19K00619・22K00598 の助成を受けたものである。

で「カケバ」のほか「カキヤ（一）・カカ（一）」といった形が存在し、母音語幹ではいわゆる二段活用の母音交替が生じるため「タベレバ・タブレバ・タブリヤ（一）・タブラ（一）」といった形が存在する。形容詞レバ形は「ナケレバ・ナケリヤ・ナカリヤ」といった形である。

2.3 否定レバ形

本発表で否定レバ形と称するのは、動詞否定形の仮定形のことである。「タベナケレバ・タベナケリヤ」は後半が上記レバ形と同じなのでそちらに入れ、「タベニヤ」「タベナ」「タベン」などをこちらの形として扱う。

3. テカラ形の条件文としての解釈について

3.1 テカラ形の条件的解釈について

テカラという形式は、標準日本語で事柄の前後関係を示す接続表現として用いられ、基本的には前後は事実を表すものである。宇佐・中津方言のテカラが時間の前後関係を表さず、条件文の解釈を持つと考えられるのは、次のような例があるからである。

- (1) ヒマガ [アツェカラ] ナバトリジェン イチェミローケンドガ
暇が [ある+テカラ] キノコ採りでも いてみるだろうけれども
- (2) アメン オーイ [トシジャツテカ] イツパイニ イルケンドタナー。
雨が 多い [年である+テカラ] 一杯に (実が) 入るけどねえ。
(今年はひどい干ばつで収穫は無理である、という文脈で)

この例では、テカラの前に「ある」という状態動詞や、「年だ」という状態表現が位置している。標準日本語で「暇があってから」「雨が降り年であってから」などという表現が非常に不自然であるのは、テカラに前節する述語が時間の前後関係を持っていない状態表現だからである。一方、これらの例を「暇があれば」「雨が降り年だったら」というように条件表現として解釈すれば、前後の関係も自然になる。

黒木（2008）では、テカラの前に状態述語が位置する次のような日田市方言の例を、原因・理由の順接条件と見ている。

- (3) 天気がヨクテカラ、洗濯物がすぐ乾いた（同論文 4.1）

これは概略「天気がいいので」と解釈できる例である。これにならって考えてみると、上記（1）は「ので」に置き換えにくく、（2）は一見「ので」に置き換え可能に見えるが「今年はひどい干ばつだった」という前後の文脈を考えると反事実の条件文となっているため、こちらも原因・理由の解釈はできない。これらのことから、少なくともこれらは確実に仮定的条件の文といえる。

3.2 テカラの解釈と条件文の種類

テカラが仮定的条件の解釈を持てることは上記の議論で明らかになったが、条件文が持つ多様な解釈のうち、どのような解釈があるかという点は別に観察する必要がある。以下では、有田（2017）の条件文の分類をもとに、テカラ文がどの分類の用法を持っているか確認する。

まず、発話時に真偽が決定されない（非既定的）前件を持つ予測的条件文の例を見る。

- (4) ヤメー [イツェカラ] ウーゴツジャチュチ。
山に (火が) 入ってカラ 大事だといって。

(4) は山火事の危険について話している文脈で、当然山に火は入っておらず、入った場合のことを考え

て「おおごとだ」と言っている。

反事実的条件文は、前件が事実と反していることを知った上での仮定を述べるものであり、先に挙げた(2)がそれに当たる。

総称的条件文は、前件と後件が個別的な関係を超えた習慣的・法則的な関係を表すものである。

(5) ゴガトゥニ [ナツテキテカラ] コドムム オトナム タブールト。

(苺は) 5月に なくてきテカラ 子供もオトナも 食べるって。

この例は5月の子どもの日前後のことを述べた文であり、特定の出来事とは関係なく示されたものであるため、総称的条件文だといえる。

認識的条件文は、前件が発話時点で真か偽か定まっているものである。標準日本語では典型的には「(の)なら」が使われるところであるが、本データの中にこれに対応するテカラ形はなかった。これは、テカラが認識的条件文に使えないということを表している可能性もあるが、そもそも認識的条件文は使用頻度が少ないため、使われなかった可能性もある²。

最後は事実的条件文である。これは前件も後件も事実として成立する文である。両方とも事実である場合、標準日本語のテカラと重なる部分が大きくなる。

(6) [キレチカル] トチューガ モー ミズガ イッペジャッタキタナー。

(土手が) 切れテカラ 途中が もう 水が いっぱいだったからねえ

これは台風の被害の経験を語る文脈であり、土手が切れたこと、水がいっぱいだったことは過去の事実である。標準日本語のテカラにそのまま置き換えると、後件の「水がいっぱいだった」という状態述語が不自然に感じられるところがある。タラに置き換えて「土手が切れたらもう水がいっぱいだった」という形にすれば自然であるため、まだ条件的ではある。しかし次のような例では、標準日本語のテカラと区別がつきにくい。

(7) オリーチ シモーチ [キラシェチカラ] ソルー ボンボン ボンボン ワリョッタシヤラ。

(竹を山から) 下ろしてしまって 切らせテカラ それを ボンボン ボンボン割っていたんだよ

前件・後件ともに変化動詞の場合、事実的条件文とテカラ文はほとんど重なる。もちろん「切らせたら」と条件形式にしても不自然ではないため、どちらでも使えることになる。

実際の例を見る限り、テカラの事実的解釈は条件文的なニュアンスも持ちうるものがほとんどであるため、条件文ではないとは言いきれない。しかし以下のような例では条件文の解釈がなくなる。

(8) イチゴ [トゥクリタッテカリ] モー ジューネンノ ウイー ナロガエ。

苺を 作り始めテカラ もう 十年以上に なるでしょうがね

このテカラはタラに置き換えることは不可能であり、確実に事実的解釈しかない。つまり、当方言のテカラは条件専用形式ではなく、時間の前後関係も表せるということである。これは黒木(2008)で主張された日田市のテカラの用法の広がりとは違った方向で意味が広がっていることを示すものである。

4. 宇佐・中津方言の条件表現の量的分布

本節では宇佐方言のコーパスより条件表現を抽出し、その量的分布について確認する。条件表現は標

² 2018年に行った中津市での調査では、「山本サンガクルンジャッテカラワタシモイコーカーナ」(山本さんが行くのなら私も行こうかな)という認識的条件文の回答(エリシテーション)を得ている。各用法の地理的分布については三井(2019)が詳しい。

準日本語でも複数の形式を持ち、入れ替えが可能な場合も多い。方言においても状況は同じであるが、複数の形式が使える場合、エリシテーション調査では全ての可能性を確かめることは話者の負担からみてもかなり難しい。そもそも従属節は文が長くなりやすく、すべての可能性を尽くすと調査文の数も膨大になってしまう。そこで、おおまかな体系を見るために、一定量の談話の中に生起する該当表現の量的分布を観察する。

まず宇佐・中津方言で条件表現と思われるものとして (A) テカラ類 (B) レバ類 (C) 否定レバ類 (D) タラ類 (E) ナラ類 (F) ト類が挙げられる。それらを、(イ) 文中の接続助詞として使われているもの (ロ) 他の形と融合して文頭の接続詞となっているもの に分けて調査する。以下にその結果を示す。

	テカラ類	レバ類	否定レバ類	タラ類	ナラ類	ト類
文中	144	105	46	25	18	13
文頭	30	0	0	27	26	1

表 1

まず全体的な分布でいうと、テカラ類とレバ類でかなりの数を占めるため、この2つが体系の軸になっていると思われる。否定レバ類はレバ類と同様に文頭用法がなく、ひとつにまとめられる。タラ類・ナラ類は比較的少ない割に文頭に多く分布している。ト類は頻度が少ない。以下に各表現の用法や分布の偏りについて記述する。

4.1 テカラ類の分布

テカラ類は文中用法に比べると文頭用法は少なめである。文頭用法の形式としては「ホシチカラ・ホッチカ・ホッテカラ」がほとんどで、指示詞にテカラが付いた形と思われる。造語法としては、いわゆる接続詞のつくりと同様である。つまり、テカラ類は接続詞形成を担う重要な形式であることがわかる。文頭用法は標準日本語の「そうしたら」よりも軽く単純な「それで」に近い用法も多く見られる。

なお、今回のデータの元となった会話は「昔のことについて自由に話す」という形で進んでおり、情報提供の流れが中心であるため、文末モダリティの種類が少ない。そのため、条件文の調査に必要な文末モダリティ（例えば禁止や命令、依頼など）が使われず、条件表現の使い分けのチェックがあまり適用できない。そういう制限はあるものの、テカラ類は前節でみたように用法の広がりが大きく、本データの中心的な条件表現であることは確かである。

なお、テカラの事実的用法にはテカラの繰り返しがいくつも見られる。

(9) ソルー トッチェ [キチェカー] ソル [ニチェカラ] ガワジー アミュー エーチ シヨッタ
それを とって きテカラ それを 煮テカラ 殻で 網を 焼いて していた
これはテ形を重ねて話を進める用法とよく似ている。黒木 (2008) では「付帯状態、手段・方法、同時、開始時点、原因・理由、並列の用法において、「て」と同様に用いられる」と記されていることと関係があるように思われる。

4.2 レバ類・否定レバ類の分布

レバ類は後件に特徴的な述語が見られる。

(10) イロガ [アーコカラー] デーブン イーンジャ。(「良い」)

(芋の) 色が 赤ければ だいぶん いいんだ

否定レバ類は上記と逆のタイプの述語と結びつく。後件がない言い差しの形でも「なければならない」

という意味になる。

(11) フユマジ キッテ [シマワン] ナランチ。 (「ならない」)

冬までに 切って しまわなければ ならないって

(12) ヨンシェンエンナ [ヤリヤナ]

四千円は やらないと (いけない)

並列用法や「～さえすれば」、「～といえは」にあたる熟語的な用法がある。

(13) イマズモ [トウクッチョリヤー] トヨオカモ トウクッチョルケンド

今津も 作っていれば 豊岡も 作っているけれど

(14) ベンキョー サエ [スリヤー] ウッノ コター ナーンモ シェンジェン…

勉強 さえ すれば うちの ことは なにも しなくても…

(15) [マツタケチャ] アンマリ コッチン ホーニャ オランジャッタ…

松茸といえは あまり こちらの ほうには なかった

事実的用法は以下の1例のみである。

(16) ヘベガ ソキン オッチョル。 コキン オッチョルチ。 コー [ミリヤー] マムツジャラ。

蛇が そこに いる。 ここに いるって。 こう 見れば マムシだよ

レバ類には標準日本語の仮定形とは異なった用法がある。

(17) マムシガ イッチョルデチュチカラ マムシャ [イッチョラ] シェンチュチ。

マムシが 入ってるよと言ったら マムシは 入って+レバ しないと行って

(17) の「イッチョラ」は「入っていれば」ではなく「入っていは(しない)」という形に相当する。レバ形が「～テハ」の機能も併せ持っていることになる³。

以上のように、レバ類はかなりの性質を標準日本語の仮定形と共有している。これをテカラと合わせて考えると、レバ類が仮定形、テカラ類は標準日本語のタラ形と対応する体系であると考えられる。

4.3 タラ類の分布

タラ類については、文頭用法が特徴的である。「ホシタラ・ホーシタラ・ホッタラ」という接続詞的な形と、何もつけずに「タラ」単独で接続詞として使うパターンが見られる。いずれも条件のタラのニュアンスを残した接続詞のようである。文中用法はほとんどが事実的用法である。

(18) レンコンバタケー [イタラ] ハチワレッシモーチョル。

レンコン畑に いったら (水がなくなって) ひび割れてしまっている。

4.4 ナラ類の分布

文中用法ではほとんど名詞が前接する。

(19) [ムカンナラ] ジュンビジャラ [イマナラ] ウエツ シモーチョルケド

昔なら 準備だよ 今なら 植えて しまっているけど

接続詞用法は「ホンナ・ホンナカ・ホンナラ」という形が用いられる。

4.5 ト類

文中用法がほとんどで、事実的用法のみである。

4.6 各類の分布まとめ

³ レバ形がテハと同じ使い方ができるのは大分市方言も同様である。

データの範囲で考える限り、本方言はテカラ類とレバ類が中心になった条件表現体系であり、それに比べるとタラ類・ナラ類・ト類は特定の用法はあるものの分布は限られていることがわかる。

5. テカラの用法の広がりと制限

条件表現は文中の表現であるが、文末に位置して固定的な意味を持つに至ることがある。否定レバ形の「イカナ（行かなければならない）」に見られるような用法である（原田発表の「脱従属化」）。

標準日本語では、タラ・レバの形を文末で使うと「具合が悪いんだったら、医者に行けば？」のような「勧め」の用法になる⁴。しかし、本方言のテカラにはそのような用法は無いようであった⁵。

これには別の要因がありそうである。本方言を含む九州の方言には、「～テカラ」に以下のような用法が見られることがある。

(21) コンナ大切ナ日ニ寝坊シテカラ…（こんな大切な日に寝坊なんかしてしまって（困ったことだ））
この用法がどれくらいの範囲で使われているかは明らかでないが、中津方言話者も使うという報告がある。もし上記の用法があるのなら、「勧め」の用法とはかなり方向の違う用法であるため、「勧め」の用法が獲得できないようにブロックされているという可能性があるように思われる。

6. まとめと今後の課題

本発表の目的は、宇佐・中津方言の条件表現の全体像をコーパスを用いて調べるというものであった。しかしデータが内在的に持つ制限から多くのことが不明のままである。より多くのバリエーションのある対話データを収集し、エリシテーション調査を注意深く進めることが必要である。大西編（2016）には、本方言と同様にカラ（の対応形式）を条件表現として使っていると思われる方言（言語）として、琉球諸語の例も示されていた。これらの言語についても情報交換を進めながら記述を進めていきたいと考えている。

参考文献

- 有田節子（2017）「日本語の条件文分類と認知的条件文の位置づけ」有田節子編『日本語条件文の諸相—地理的変異と歴史的変遷—』, pp. 3-32, くろしお出版
- 大西拓一郎編（2016）『新日本言語地図—分布図で見渡す方言の世界—』朝倉書店
- 黒木邦彦（2008）「大分県日田市方言における『-てから』の用法：「-て」「-きー」「-けんど」「-けどが」との比較をとおして」『阪大社会言語学研究ノート』 pp.89-100.
- 三井はるみ（2019）「条件表現の全国分布に見られる経年変化—予測的条件文の場合—」『国語研究』82, pp.40-59.

⁴ 例えばナラの用法が非常に広い福岡県久留米市城島方言では、「病院イクナラ？」でアドバイスの意味になるという。

⁵ 中津方言話者の数名に「病院イッテカラ？」と言ってアドバイスできるかと尋ねたところ、それは難しいという回答を得た。